

東歌・防人歌にみる武蔵

Musashi Province as Described in the *Manyoshu*:
Poetry Composed by People in Eastern Japan (*Azumauta*), and
Poetry by Coastal Guards, and Their Wives (*Sakimorinouta*)

Tomoko Karasudani

Abstract

In the ancient Nara period, present day Setagaya-ward, Tokyo, was part of Musashi province. The author reviews its historical background using work done by previous researchers, and considers surviving ancient relics in today's Setagaya. The county name Seta appears in the *Wamyoruijusho* (Japan's oldest dictionary of Chinese characters edited in the Heian period). In addition, there is evidence in the *Nihon Shoki* (Chronicles of Japan compiled in the Nara period) and in the *Shoku Nihongi* (Second of the six classical Japanese history texts in the Heian period) that nearly 1,800 Korean people, including a few nuns and priests from areas then called Kudara, Shiragi and Kokuri, naturalized in Musashi. Though the distribution is not certain, we can surmise that those people played a role in the development of the culture of Eastern Japan. In the *Azumauta*, collected in Musashi province, the rhetorical technique called *jokotoba* is prevalent. The preface words, or *jokotoba*, in eight of the nine poems begin with place names. This suggests that the poetry is inextricably related to the natural features or scenes of the province. In two Musashi poems in the *Manyoshu* the flower *ukera* (*Atractylodes japonica*) appears. The uncontrollable emotion of love is symbolized by this plain edible plant that was used as a medical herb at the time. The exclusive characteristic of *Sakimorinouta* in Musashi province is that they include elegies by the wives of coastal guards. Six out of the twelve poems are of this type. In the poetry of the region, the dialects of the east are recorded. For example in a poem by a husband in Ebara-county, "house" is transcribed *ihe* while in a poem by a wife it is *iha*. The distribution of dialects in the *Manyoshu* suggests that there was a phonetical borderline between the west and east in Musashi province during this period. Thus the regional characteristics and place names are historically inherited.

Key words: *Azumauta* (東歌), *Sakimorinouta* (防人歌), *Manyoshu* (万葉集),
Musashi province (武蔵国), *Setagaya* (世田谷)



古代武蔵国と世田谷区周辺概略図 (網かけ部分が世田谷区)

鳥谷知子

はじめに

古代の世田谷に関する資料は限られ、『新修世田谷区史 上巻』¹や、『万葉の歌—人と風土— 13 関東南部』²にすでに記し尽くされていると言っても過言ではない。筆者はそれらの中からまず現在の世田谷に関係する可能性のある資料にあたり、第一節を記述した。第二節では武蔵国の東歌、第三節では武蔵国の防人歌をもとに、万葉人の生活や心情、歌の発想や古人の思惟について記した。筆者の筆力の及ぶ範囲で武蔵国、古代の世田谷に関わる幾ばくかのことを述べたいと思う。

一 上代文献にみる武蔵・中央と武蔵の関係

世田谷は武蔵国に入る。古代の武蔵は、東京都と埼玉県、神奈川県川崎市、横浜市に及ぶ。万葉の時代には東山道所属の国だった。東歌に二首「牟射志野」という仮名書の例があり(14・三三七六、三三七九)、国名もムザシと訓む。『日本書紀』^a安閑天皇元年(五三四)の条には次のような記事がある。

武蔵国造笠原直使主と同族の小杵と、国造を相争ひて、使主・小杵は皆名なり。年を経て決め難し。小杵、性阻しくして逆ふること有り。心高びて順ふこと無し。密に就きて、援を上毛野君小熊に求めて、使主を殺さむと謀る。使主、覺りて走げ出で、京に詣でて、状を言す。朝廷、臨断めたまひて、使主を以ちて国造として、小杵を誅す。国造使主、悚り憲ぶること、懐に交ちて、黙し已むこと能はず。謹みて国家の為に、横渟・橋花・多氷・倉櫨、四处の屯倉を置き奉る。

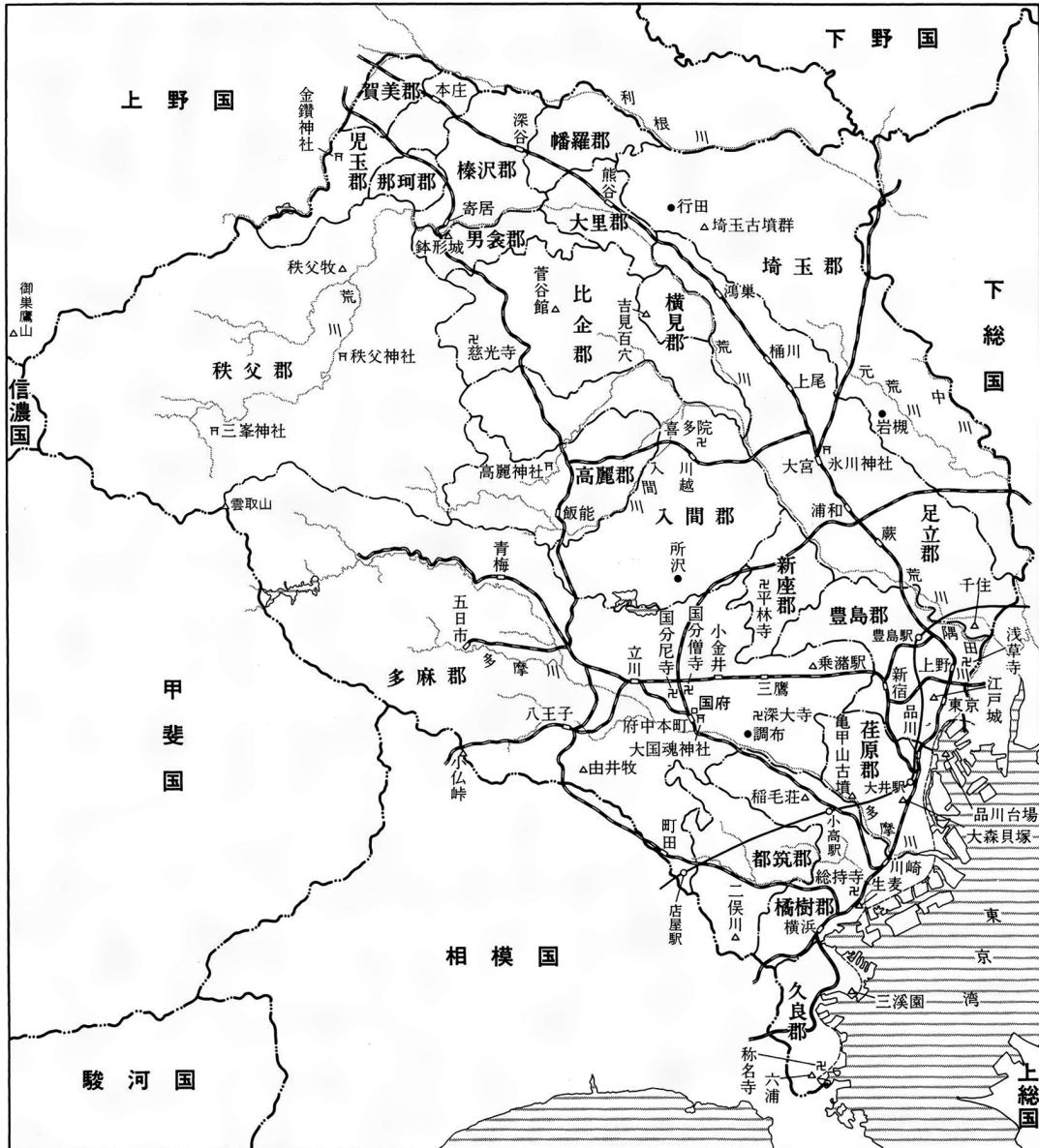
笠原は『倭名類聚抄』^b(以下倭名抄とする)に「武蔵國埼玉郡笠原」とある。埼玉県鴻巣市笠原付近とされ、行田市の埼玉古墳群を笠原直に関係づける説もある。大和朝廷の裁断によって武蔵国造の地位を巡る同族の争いに勝利した使主が献上した屯倉、横渟は倭名抄にみえる「武蔵國横見郡」の地(埼玉県比企郡吉見町一帯)かといわれる。橋花は倭名抄にみえる「武蔵國橋樹郡」の地、郷名に「御宅美也」がある。神奈川県東部、川崎市と横浜市のそれぞれ一部にあたる。多氷は『書紀集解』³に倭名抄の「武蔵國久良郡大井井於保」郷にあてる説、『日本書紀通證』⁴に、武蔵國多磨郡かとする説がある。通証の多磨郡説を採れば、「多氷」は多磨郡と中野・杉並・世田谷などの区の西側の一部に及ぶ。倉櫨は倭名抄に「武蔵國久良郡」とあり、「久良」に「久良岐」の訓がある。「櫨」を「樹」の誤りとし、倉櫨郡を「久良郡」にあてる説がある。久良郡は武蔵國の南部で、横浜市の中部・南部にあたる。安閑紀によれば多摩川流域の地に大和朝廷の直轄地が置かれたことがわかる。



大國魂神社前に置かれた国分寺の礎石



国分寺の礎石



〈武蔵国略図『國史大辭典 第13巻』1992年4月 598頁〉

武蔵国は、久良・都筑・多磨・橋本・荏原・豊島・足立・新座・入間・高麗・比企・横見・埼玉・大里・男衾・幡羅・榛沢・那珂・児玉・賀美・秩父の二十一郡を有した大國であった。このうち世田谷地方は、多磨郡(多摩郡)の勢多郷と荏原郡の覚志郷に擬定されている。宝龜二年(七七二)十月己卯条(統日本紀 卷第三十一)の太政官奏では、武蔵国は東山道から東海道に属する国となった。武蔵国府は府中に置かれた。今の大國魂神社のあたりである。延喜式卷二十八 兵部省には、「武蔵國驛馬(店屋。小高。大井。傳馬。都築。橋本。荏原。豊嶋各十疋。傳馬。豊嶋各五疋)とある。店屋・小高・大井・豊島駅が置かれ、交通が整備された。乗瀨駅(延喜式には記載がない)は、豊島駅と武蔵国府とを結ぶ支路の駅で、杉並区天沼あたりとされる。店屋駅は相模国府に通じていた。



大國魂神社



武蔵国 最勝院国分寺

大化の改新後の武蔵国は、その国府を多磨郡小野郷に置く。倭名抄 巻五 國郡部には「武蔵國國府在多磨郡」「多磨國府^{太婆}」とある。武蔵國府跡は「府中市の南端を流れる多摩川左岸の立川段丘上から沖積微高地上に立地し、その関連遺跡群も含めた範囲は、東西約三キロメートル、南北最大一・八キロメートルに及ぶ⁵」とされる。現在の府中市にある大國魂神社（府中市宮町）東側一帯の京所地区^{きょうじょう}に国衙が比定されている。国府の北方三キロメートルの地に国分寺もあった。現在の最勝院国分寺は史跡地の北（国分寺市西元町）にある。

『日本靈異記』^cには多磨郡の説話が三話ある。中巻第三縁は武蔵國多麻郡鴨の里の住人吉志火麻呂が同伴某人に指名されて筑紫の防人に三年赴く

話である。中巻第九縁は武蔵國多磨郡の大領大伴赤麻呂が自ら建立した寺の財物を借用したまま死んで牛に生まれ変わり負債を償う化牛説話で、郡司層の仏教への関わりがうかがわれる。下巻第七縁は、武蔵國多磨郡小河郷の正六位上大真山継が観音の靈験により罪を免れ、多磨郡の少領に任じられる話である。

『先代舊事本紀』^d巻第十「国造本紀」によれば、武蔵國には、无邪志国造・胸刺国造・知々夫国造の三国造が存在していたらしい。无邪志国は埼玉県大宮を中心とした荒川流域を、胸刺国は多摩川流域をさす。それぞれ北武蔵と南武蔵、秩父郡地方に大きな力をもっていたのであろう。

天武紀十三年（六八四）の条^eには次のようにある。

五月の辛亥の朔にして甲子に、化来る百済の僧尼と俗人の男女、并せて二十三人、皆武蔵國に安置らしむ。戊寅に、三輪引田君難波麻呂を大使とし、桑原連人足を小使として、高麗に遣す。

前者は百済の渡来人を武蔵國に置いた記事である。後者は、朝鮮半島の不穏な情勢を示す記事である。新編日本古典文学全集日本書紀の頭注には次のように記される。「新羅王によって封冊された「高句麗王」安勝は神文王三年（六八三）十月に新羅の都に呼び寄せられ、金馬渚への帰国は認められず、新羅は領域内の「高句麗」の消滅をはかっており、翌年十一月には再興高句麗の地は新羅の金馬郡となる。今回の遣高麗使は内乱勃発目前の騒然たる金馬渚訪

問となり、新羅軍による高句麗覆滅後の帰国となった。天武紀十四年(六八五)九月条に、「癸亥に、高麗国に遣せる使人等還れり。」とあり、「庚午に、化来る高麗人等に、禄賜ふこと各差有り。」と記される。六八四年に国を滅ぼされた高句麗人の中には、日本への亡命を試み、遣使に従って来朝した者も存したと思われる。また、持統紀元年(六八七)四月条と四年(六九〇)二月条には次の記事がある。

夏四月の甲午の朔にして癸卯に、筑紫大宰、投化せる新羅の僧尼と百姓男女二十二人を献る。武蔵国に居らしめ、賦田ひ受稟ひ、生業を安からしめたまふ。壬申に、帰化ける新羅の韓奈末許満等十二人を以ちて、武蔵国に居らしむ。

以下、武蔵国と渡来人の関わりを示す記事には次のようなものがあり、高麗郡・新羅郡の設置が渡来人の居住によってなされている。

『続日本紀』元正天皇霊龜二年(七二六)五月の条^f

辛卯、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷し、高麗郡を置く。

『続日本紀』聖武天皇天平五年(七三三)六月の条^f

六月丁酉、(中略)武蔵国埼玉郡新羅人徳師ら男女五十三人を、請に依りて金の姓とす。

『続日本紀』淳仁天皇天平宝字二年(七五八)八月の条^g

癸亥、帰化きし新羅の僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人を武蔵国の閑地に移す。是に始めて新羅郡を置く。

これらの記事から百済や新羅の僧尼や渡来人を武蔵国に居住させ、開発にあたらせていたことは知られるが、世田谷との直接的な関わりは不明である。律令制下の国郡郷を示す倭名抄 武蔵国によれば「多磨郡 小川^{加波} 川口^{加波} 小楊^{乎也} 小野^乎 新田^{余布} 小島^{乎之} 海田^{安萬} 石津^{伊之} 狛^{乎加} 江^{古乃} 勢多」(平安時代末期写の高山寺本では「狛江^{古乃}」)とあり、多磨郡には十の郷が存した。狛江の地名は現在も残り、狛江郷の由来は渡来系の人々が多数居住したことによるといわれる。高麗人の居所「高麗居」に由来するとする説があり、現狛江市駒井が遺称地とされる。一九五一年に発掘調査が行われた狛江市亀塚古墳(五世紀末〜六世紀初頭)から出土した金銅製毛彫飾金具三枚には、エキゾチックな人物・ペガサス・竜とそれぞれに唐草文の毛彫りが施されている。その構図や筆致が高句麗古墳の壁画に類似していることから、狛江地域と渡来人との関係が推定されている。天平十三年(七四二)には国分寺建立の詔が出される。武蔵国国分寺域からは「狛」の逆字を押し印した文字瓦が出土しており、「狛」とあるのは狛江のことであろう。国分寺の建立に狛江郷も協力したという証拠である⁸、「多」「多麻」「玉」「狛」「狛江」という文字瓦は多磨郡や狛江郷から寄進された瓦であり、非常に貴重である⁹などの指摘や、「同(狛江)郷に含まれると思われる現調布市入間町城山遺跡で検出された墨書土器銘「高大寺」は高麗大寺の略とみられ、入植した渡来系の人たちが寺院を建立していたことが推知される¹⁰」という言及などから、世田谷の地と渡来人は関わっていたのだろう。武蔵国と深い繋がりをもつ人物として福信がいる。以下『続日本紀』桓武天皇延暦八年(七八九)十月の記事をあげる^h。

乙酉、散位從三位高倉朝臣福信薨しぬ。福信は武蔵国高麗郡の人なり。本の

姓は肖奈。その祖福德、唐将李勣、平壤城を抜くに属りて、国家に来歸きて、武蔵の人と為りき。福信は即ち福德の孫なり。小年くして伯父肖奈行文に随ひて都に入りき。時に同輩と晩頭に石上衢に往きて、相撲を遊戯す。巧にその力を用ゐて能くその敵に勝つ。遂に内裏に聞えて、召して内豎所に侍らしめ、是より名を着す。初め右衛士大志に任し、稍くして遷りて、天平中に外従五位下を授けられ、春宮亮に任せらる。聖武皇帝甚だ恩幸を加へたまふ。勝宝の初、従四位紫微少弼に至る。本の姓を改めて高麗朝臣と賜ひ、信部大輔に遷さる。神護元年、従三位を授けられ、造宮卿を拜し、兼ねて武蔵・近江の守を歴たり。宝龜十年、書を上りて言さく、「臣、聖化に投してより年歳已に深し。但し、新しき姓の榮、朝臣は分に過ぐと雖も、旧俗の号、高麗は未だ除かれず。伏して乞はくは、高麗を改めて高倉とせむことを」とまうせり。詔して、これを許したまひき。天応元年、彈正尹に遷され、武蔵守を兼ねたり。延暦四年、表を上りて身を乞ひ、散位を以て第に帰りき。薨しぬる時、年八十一。

『法隆寺献物帳』（寧楽遺文）には天平勝寶八歳（七五六）七月八日の記事に「従四位上行紫微少弼兼武蔵守巨萬朝臣「福信」の署名がある。高麗郡から出た渡来人が紫微中台という国家の中枢におり、武蔵守になったことがわかる。武蔵國高麗郡には「高麗古」郷が残る。聖天院（埼玉県入間郡日高町）高麗山勝樂寺には高麗王若光の墓が伝わる。高麗神社には若光をまつる。武蔵国には渡来人との関わりが記される。

『続日本紀』淳仁天皇天平宝字二年（七五八）八月の条には、次のようにある。

癸亥、帰化きし新羅の僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人を武蔵国の閑



聖天院高麗王廟

地に移す。是に始めて新羅郡を置く。

新羅郡は宝龜十一年（七八〇）五月条を最後にその名がみえなくなる。その後新座郡と改称されたらしい。倭名抄の訓は「爾比久良」、足立郡と入間郡の間に新座郡がのせられる。倭名抄には「荏原郡 蒲田太加萬 田本 多毛 満田上音 荏原江波 覺志加、御田 木田多 櫻田佐久 驛家」とある。この荏原郡覺志郷と多磨郡勢多郷が世田谷区域内に比定される。世田谷は倭名抄多磨郡の勢多郷に由来し、瀬田はその遺名とされている。

武蔵国が東海道所屬へと改められたことは『続日本紀』光仁天皇宝龜二年（七七二）十月条にみえる。

己卯、太政官奏すらく、「武蔵国は山道に属すと雖も、兼ねて海道を承けたり。公使繁多くして祇供堪へ難し。その東山の駅路は上野国新田駅従り下野国足利駅に達る。此れ便道なり。而るに枉りて上野国邑楽郡従り五箇駅を経て武蔵国に到り、事畢りて去る日に、また同じき道を取りて下野国に向ふ。

今東海道は、相模国夷参^{いさまのつぎまら}駅^{しちつぎまら}従り下総国に達るまで、その間四駅にして往還便ち近し。而して此を去り彼に就くこと、損害極めて多し。臣ら商量するに、東山道を改めて東海道に属らば、公私所を得て、人馬息ふこと有らむ」とまうす。奏するに可としまふ。

武蔵国が東海道所属になったことで、東海道は相模国から店屋駅（町田市町谷付近）↓小高駅（川崎市高津区末長小高から新作小高付近）↓大井駅（品川区大井）↓豊島駅（北区御殿前遺跡付近）を経て下総国府に至る経路が考えられている。¹¹万葉集の最終歌は天平宝字三年（七五九）の家持歌であるが、巻十四の「東歌」における武蔵国は、東海道に置かれており、これは天平宝字三年から十二年後の宝龜二年以降の万葉集編纂時の状況を反映しているものと考えられる。巻二十の「防人歌」では武蔵国の防人たちが国府から部領使の掾正六位上安曇宿禰三國に伴われて、天平勝寶七歳（七五五）に足柄峠を越えていく様が詠まれる（四四二三・四四二四）ことからこの時点ですでに東海道を用いていたことがわかる。武蔵国の防人歌は巻二十の四四一三〜四四二四の十二首である。この中には防人の妻の歌も六首含まれる。左注に防人の出身郡と氏名が記される。四四一三〜四四二二番は歌番号の下に左注のみを記した（引用文に付した傍線・傍点・囲み等は筆者による。以下同じ）。

- 二〇・四三三 右の一首、上丁那珂郡の檜前舍人石前が妻の相伴部真足女
- 二〇・四四四 右の一首、助丁秩父郡の相伴部小歳
- 二〇・四四五 右の一首、主帳荏原郡の物部歳徳
- 二〇・四四六 右の一首、妻の椋椅部刀自売
- 二〇・四四七 右の一首、豊島郡の上丁椋椅部荒虫が妻の宇遲部黒女

- 二〇・四八六 右の一首、荏原郡の上丁物部広足
- 二〇・四八九 右の一首、椋樹郡の上丁物部真根
- 二〇・四九〇 右の一首、妻の椋椅部弟女
- 二〇・四九二 右の一首、都筑郡の上丁服部於由
- 二〇・四九三 右の一首、妻の服部皆女
- 二〇・四九四 足柄のみ坂に立して 袖振らば 家なる妹は さやに見もかも
- 二〇・四九三 安之我良乃 美佐可尔多志呂 蘇渥布良婆 伊波奈流伊毛波 佐夜尔 美毛可母

- 二〇・四九四 右の一首、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂
- 二〇・四九四 色深く 背なが衣は 染めましを み坂賜らば まさやかに見む
- 伊呂夫可久 世奈我許呂母波 曾米麻之乎 美佐可多婆良婆 麻佐夜 可尔美無

右の一首、妻の物部刀自売
二月二十九日に、武蔵国の部領防人使掾正六位上安曇宿禰三國が進る歌の数二十首。ただし、拙劣の歌は取り載せず。

都筑郡・椋樹郡・荏原郡・豊島郡・秩父郡は多磨郡に隣接する郡である。多磨郡の防人歌は載せられないが、『日本霊異記』中巻第三縁には武蔵国多麻郡鴨の里の住人吉志火麻呂が相伴某人に指名されて筑紫の防人に三年赴く話がある。多磨郡の兵士も防人として赴いた可能性はあろう。

卷九の高橋連虫麻呂歌集に武蔵国に下った時の歌一首

- 武蔵の小埼の沼の鴨を見て作る歌一首
- 九・一七四 埼玉の 小埼の沼に 鴨そ翼霧る 己が尾に 降り置ける霜を 払ふとにあらし

都から訪れた官人高橋虫麻呂が詠んだ旋頭歌である。養老三年（七一九）七月には常陸国守となり、按察使として安房・上総・下総の三国を管轄した藤原宇合（養老五年正月に正四位上となり離任か）との主従関係から、虫麻呂が国府の官人として常陸に在任したのを養老年間とみる説、また天平年間とみる説もある。右の歌も東山道所属の養老から天平年間に作られたのであろう。冬の沼地の荒涼とした風景が浮かんでくる。東歌（14・三三八〇）にも「埼玉の津」が詠まれている。「小埼の沼」は、行田市埼玉の尾崎沼神社あたりが小埼沼跡と称される（名残として「武蔵小埼沼」の碑が建つ）。江戸時代後期の『新編武蔵風土記稿』巻之二百十六埼玉郡之十八忍領埼玉村の条に、「埼玉沼」「村ノ北ニアリ古へ小埼沼或ハ埼玉津ナト云テ萬葉集ニモ歌アリテ當國ノ名所ナリ」とあり、「埼玉沼邊尾崎沼邊之圖」として絵図を載せる。^k

武蔵国の歌は東歌として相聞の部に九首採録されているが、次の歌は最もよく知られる。

一四・三七三 多摩川に さらす手作り さらさらに なにその児の ここだかな
しき

多麻河泊尔 左良須豆久利 佐良左良尔 奈仁曾許能兒乃 己許太
可奈之伎

三三七三番の万葉歌碑は狛江市にある。真鶴産小松石を用いた高さ二・七メートル、幅一・四二メートルの巨碑である。揮毫は松平定信（業翁）。この歌碑の初代碑は、文化二年（一八〇五）に猪方半繩（現在の猪方四丁目辺り）に建てられたが、洪水で流失した。大正時代に玉川史跡猶予会が結成されると、松平定信を敬慕する渋沢栄一らと狛江村の有志らが協力し、大正一三（一九二四）年、旧碑の拓本を模刻して現在の新碑が建てられた。



多摩川



右歌碑拓本



多摩川万葉歌碑

多摩川は「六玉川（むたまがわ）」の一つで、水路として活用され東海道の矢口・脇往還の登戸・丸子など渡船場が多くあった。沿岸には調布・布田などの地名が残り、布さらしで知られ、「調」として朝廷に貢献された。「手作り」「晒す」などと共に詠まれることが多い¹²とある。区内の砧、調布市などの名称は、調布の生産に関わる地名といわれている。

天武紀五年四月の条には封戸の記事がみえる。大宝令制では封戸の納める租の半額と調・庸の全額が封の所有者の収入となる。

辛亥に、勅すらく、「諸王・諸臣の給はれる封戸の税は、以西の国を除きて、相易へて以東の国に給へ。（中略）」とのたまふ。

西国の封戸が東国に移されたようである。封戸は『延喜式』卷二十二民部省上に、

凡諸家封戸、各爲三分一、一分充_二輪_レ絶國、二分充_レ布國、但伊賀、伊勢、

參河、近江、美濃、越中、石見、備前、周防、長門、紀伊、阿波等國不_レ得_レ充_レ封

とあり、絶・布に重点を置いて設定されていた。武蔵国の特徴は封戸が多いことである。『新抄格勅符抄』第十卷抄 大同元年牒によれば、武蔵国には次のような寺領があった。

東大寺 四百五十戸

西大寺 二百五十戸

法花寺 五十戸

薬師寺 百戸

山階寺 百戸

飛鳥寺 四百十五戸

川原寺 百五十戸

大安寺 百戸

武蔵国は封戸が関東八国の中でも特に多い。薬師寺は讚岐国二百戸と比べると少ないが、それでも百戸である。絶・布の貢進が非常に多かったことがわかる。『延喜式』卷二十三 民部省下には

武蔵國 筆一百管、膠五十斤、麻黃五斤、麻子六斗、*五十斤の異本もある。

武蔵國 絶五十疋、布一千五百端、商布一萬一千一百段、鼓六石五斗。龍鬚

席卅枚、細貫席卅枚、席五百枚、履料牛皮二枚、鞞廿具、鹿革六十張、

鹿皮十五張、紫草三千二百斤、木綿四百七十斤、櫛子四合、

『延喜式』卷二十四 主計寮上には、武蔵国から貢上した調が次のように規定されている。

武蔵國行程、上廿九日、下十五日、

調、緋帛六十疋、紺帛六十疋、黄帛一百疋、橡帛廿五疋、紺布九十端、縹布五十端、黄布卅端、自餘輪_二絶、布_一、

こうした機織りに武蔵国に移り住んだ渡来人の技術が活かされたことは、『万葉集』卷十・二〇九〇番の七夕歌や卷十二・二九七五番の正述心緒、卷十四・三四六五番の東歌の中の「高麗錦」の語に示唆される。六六八年に国が滅亡しても、その文化は古代日本の文化の形成に大きな影響を与え、「高麗」の名はその様式を受け継いだ高級工芸品に対して用いられた。なお、『新編武蔵風土記稿』卷之九十三多磨郡之五 上布田宿の布多天神社

の条には、「桓武天皇延暦十八年木綿ノ實始メテ渡リシナレト人イマタ布ニ製スルコトヲシラス其時多磨川邊ニ菅家ノ所縁ニテ近國ニ名ヲ顯ハセシ廣福長者トイヘルモノアリ天神ノ社ヘ七晝夜參籠シテ不思議ニ神ノ告ヲ蒙リ布ヲ製スルノ術ヲ得テ多磨川ニサラシテコレヲト、ノヘテ奉リヌ是乃本朝木綿ノ初ナリトカヤ帝御感淺カラス即チ其布ヲ調布トノタマヘリソレヨリ此邊武州調布ノ里トイヘリ」という木綿の生成と調布の地名起源が伝えられる。『日本後紀』桓武天皇延暦十八年（七九九）七月是月条には、一人の天竺人が參河國に漂着し、綿種をもたらしたと記される。

次に、東歌に詠まれたうけらについて記す。『万葉集』にはうけらの花は三首（或本歌を含めれば四首）に詠まれいずれも東歌であり、三首のうち二首は武蔵野の歌である。

一四・三七六 恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の うけらが花の 色に出なゆめ

古非思家波 素弓毛布良武乎 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 伊呂尔
豆奈由米

或本の歌に曰く、「いかにして 恋ひばか妹に 武蔵野の うけらが花の 色に出ずあらむ」

或本歌曰、伊可尔思弓 古非波可伊毛尔 武蔵野乃 宇家良我波奈乃 伊呂尔低受安良牟

一四・三七九 我が背子を あどかも言はむ 武蔵野の うけらが花の 時なきものを
和我世故乎 安杼可母伊波武 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 登吉奈
伎母能乎

右の二首が武蔵野の歌で、未勘国歌に一首載せられている。

一四・三五三 安齊可瀉 潮干のゆたに 思へらば うけらが花の 色に出めやも

安齊可我多 志保悲乃由多尔 於毛敵良婆 宇家良我波奈乃 伊呂尔
弓米也母

これらにはすべて花が詠まれ、うけらの花が「色」や「時」を起こす序となっている。「色に出づ」は、秘めていた恋の思いを表に出す意である。

卷十一・二七二五の「黄土」、二七八四の「韓藍の花」、卷十二・二九七六の「紫」では、「色に出」すの「色」は赤系統といわれる。うけらの花は秋に白または淡紅色の花を開き、目立たないように顔色にお出しなさいますなという形容に用いられる。これについては、第二節に記す。『増訂萬葉集全註釋十』¹³では「ウケラの花は、夏期にかけて長いあいだ咲くので、時無シを引き起している」とする。うけら、をけらは『播磨國風土記』や『出雲國風土記』に、「白朮」と記され、その茎根が薬とされた。



うけらの花

天武紀十四年九月の条には天武天皇の御病氣のことが記される。

丁卯に、天皇、体不^{みやまひ}予したまふが為に、三日、大官大寺・川原寺・飛鳥寺に誦経せしむ。因りて稻を以ちて三寺に納めたまふ。各差有り。

この記事と直接関わるのかは不明だが、同十四年十月庚辰、十一月丙寅の記事に次のようにある。

庚辰に、百濟の僧法藏・優婆塞益田直金鐘を美濃に遣して白朮を煎しむ。因りて緇・綿・布を賜ふ。

丙寅に、法藏法師・金鐘、白朮の煎たるを献る。是の日に、天皇の為に招魂しき。

「白朮」はキク科の多年草で山野に自生し、若芽は食用に根茎は薬となる。『本草綱目啓蒙』には「朮」には蒼朮と白朮があり、各自異種とする。天武紀では白朮の煎薬を献じたところから天武天皇の病や、招魂の儀式と関わるのかもしれない。

倭名抄には、「朮 余雅注云、朮儲律反、平介良、(中略) 本草陶注云、朮乃有二兩種、白朮、葉大有レ毛而作レ極、根甜而少レ膏、赤朮、葉細無レ極、根小苦而多レ膏」^bとあり、白朮、赤朮の別がある。江戸時代中期の『和漢三才圖會』^p巻第九十二之本山草類上巻には白朮の効用として、①中を暖める、②脾・胃の中の湿を取り去る、③胃中の熱を除く、④脾・胃を強くし飲食を進める、⑤胃を和め津液を生じさせる、⑥肌熱を止める、⑦四肢が疲れ、だるくて臥寝がちで、目は開けられず、飲食の欲のないものに効がある、⑧渴きを止める、⑨胎を安定させる、の九つを挙げる。

平安時代の『医心方』^qには薬の調合法として、『范汪方』ニ云ウ、朮、

芍薬ハ、皮ヲ刮ギテ去レ」とある。こうした朮の効能は古代から受け継がれてきたとみられる。『延喜式』^r巻三十七典薬寮の「草薬八十種」の中に「白朮」が見え、「諸國進年料雜薬」の中にある。これによれば「白朮」は畿内では山城国・大和国・摂津国、東海道では尾張国・参河国・駿河国・安房国・下総国・常陸国、東山道では近江国・美濃国・飛驒国・信濃国の諸国から貢上されたが、武蔵国廿八種の中には含まれていない。東歌をみると多くの朮が生育していたと思われるのだが、白朮の質がよくなかったであろうか。万葉集には押さえきれぬ恋情表現の対比として目立たないうけらの花が詠まれるのみである。

以上のように、現代の世田谷の地名は万葉の時代から連綿と受け継がれているのである。辺境であっても、税に関わる布や身近な植物を素材に万葉集には当時の武蔵を彷彿させる歌が残されている。

二 東歌にみる武蔵

武蔵国の歌は東歌として相聞の部に九首採録されている。

一四・三七三 多摩川に さらす手作り さらさらになにそこの児の ここだかなしき

多摩河泊尔 左良須弓豆久利 佐良左良尔 奈仁曾許能児乃 己許太可奈之伎

一四・三七四 武蔵野に 卜部かた焼き まさでも 告らぬ君が名 占に出にけり
武蔵野尔 宇良敵可多也伎 麻左弓尔毛 乃良奴伎美我名 宇良尔低尔家里

一四・三七五 武蔵野の をぐきが雉 立ち別れ 去にし夕より 背ろに逢はなふよ

武蔵野乃 乎具奇我吉芸志 多知和可礼 伊尔之与比欲利 世呂尔安
波奈布与

一四・三七六 恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の うけらが花の 色に出なゆめ

古非思家波 素弓毛布良武乎 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 伊呂尔
豆奈由米

或本の歌に曰く、「いかにして 恋ひばか妹に 武蔵野の うけ
らが花の 色に出ずあらむ」

或本歌曰、伊可尔思弓 古非波可伊毛尔 武蔵野乃 宇家良我波
奈乃 伊呂尔低受安良牟

一四・三七七 武蔵野の 草はもろ向き かもかくも 君がまにまに 我は寄りにしを

武蔵野乃 久佐波母呂武吉 可毛可久母 伎美我麻尔末尔 吾者余利
尔思乎

一四・三七八 入間道の 大屋が原の いはるつら 引かばぬるぬる 我にな絶えそね

伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波為都良 比可婆奴流々、和尔奈
多要曾祢

一四・三七九 我が背子を あどかも言はむ 武蔵野の うけらが花の 時なきものを

和我世故乎 安杼可母伊波武 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 登吉奈
伎母能乎

一四・三八〇 埼玉の 津に居る舟の 風を疾み 綱は絶ゆとも 言な絶えそね

佐吉多万能 津尔乎流布祢乃 可是乎伊多美 都奈波多由登毛 許登
奈多延曾祢

一四・三八一 夏麻引く 宇奈比をさして 飛ぶ鳥の 至らむとそよ 我が下延へし

奈都蘇妣久 宇奈比乎左之豆 等夫登利乃 伊多良武等曾与 阿我之

多波倍思

右の九首、武蔵国の歌

東歌二三七首のうち、百首あまりに序詞が用いられ、恋情を表出する。

武蔵国の歌も物の特徴に寄せて心情が歌われる。以下の歌の引用には、序
に傍線を付し、序に導かれる語は囲った。

一四・三七三 多摩川に さらさらに さらさらに なにその児の ここかな

しき

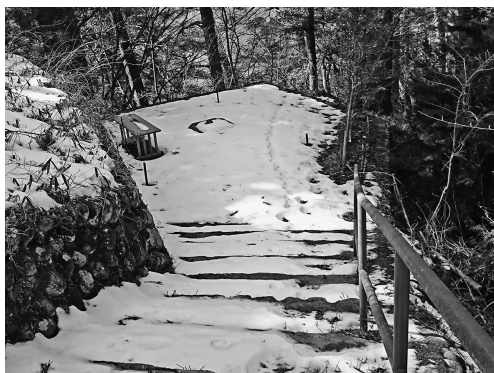
「手作り」は、細かい麻糸を織り上げた布を白くするために、水に晒し、
日に曝す。阿蘇瑞枝氏が『萬葉集全歌講義 第七卷¹⁴』で指摘するように、
サが上代でツァだったとすれば、現代人のサ行音の清音の繰り返しとは異
なる。上二句は序で、「晒す」と同音で、川の流れも思わせる。水に「さ
らす」布の揺らめきが川の水の流れや川音に重ねられ、「さらさら」と
清らかな水が絶え間なく流れるように、さらにさらにと「このこ」への思
いが募っていく、言いようも無い愛しさが「ここだ」に強調され、「かな
し」に集約されていく。前半のサ行音の繰り返しは情景を呼び起こしなが
ら歌い手の切迫した感情に繋がりが、後半の力行音の繰り返しに結びついて
歌にリズムと変化をもたらしている。

武蔵国の歌に用例はみられないが、東歌の中に男女の直接的な性愛を歌
う「寝」の語が多く用いられることは、柴生田稔氏・西郷信綱氏¹⁵によって
指摘されている。同様に、「かなし」も東歌に特徴的に用いられる語であ
ると西郷氏が言及している。三三七三の東歌に「かなし」、四四一三の防
人歌に「まかなしき」の語が用いられる。「かなし」の語について西郷信

綱氏は、「卷十一・十二で壓倒的につかはれてゐる「戀し」といふやうな表現よりは、もつと肉感にそくし、直接的愛撫とつながり、それを下地にもつた表現であるやうにおもはれる」¹⁶と指摘する。「かなし」は卷十四の東歌では三三五一、三三五八の或本歌、三三六六、三三七二、三三七三、三三八六、三四〇三、三四〇八、三四一二、三四五一、三四六一、三四六五、三四六六、三四八六、三五〇〇、三五三三、三五三七、三五三七の或本歌、三五四八、三五四九、三五五一、三五五六、三五六四、防人歌では三五六七、譬喩歌では三五七六、挽歌では三五七七にみられる。

一四・三七四 武蔵野に 卜部かた焼き まさでも 告らぬ君が名 占に出にけり

「かた焼き」は三四八八番にも詠まれ、いずれも秘められた「告らぬ」恋人の名が占いの象に現れ出たことを歌う。現在も東京都青梅市の武蔵御嶽神社では、正月三日に太占祭が行われており、男鹿の左肩甲骨を忌火で焼いた錐で突き通す鑽焼によるひび割れの如何によって、農作物の吉凶を占う。



武蔵御嶽神社太占齋場

当該歌ではすでに噂になっていた恋を占いによってあきらかにしようとしたのか、幾人か候補者を挙げて実否を占ったのか、「作者(女)の親などが相手の名を知ろうと努めた」¹⁷のか、それが「母」¹⁸なのかは不明である。歌では個人の恋愛も露わにされたことがうかがえ、「まさ」は現実、真実にも、卜占に自分の恋人の名が表れた驚きや、神意に顕れたことによつてかえって恋を宿命的なものとして受け止める女の気持ちが詠まれる。

御 祭 日		武蔵國御嶽神社太占祭一月三日																																																																																																					
元旦祭 一月一日	太占祭 一月三日	節分祭 二月三日	春季大祭 三月八日																																																																																																				
日の出祭 五月七日(宇宮)	(例祭) 五月八日(巻)	流鏝馬祭 九月二十九日	秋季大祭 十一月八日																																																																																																				
日次祭 (毎月八日)	供祭 (毎月早朝)																																																																																																						
		<table border="0"> <tr> <td>た</td><td>茶</td><td>く</td><td>か</td><td>何</td><td>う</td><td>ふ</td><td>ね</td><td>い</td><td>大</td><td>き</td><td>ぶ</td><td>に</td><td>を</td><td>小</td><td>大</td><td>せ</td><td>小</td><td>大</td><td>じ</td><td>ひ</td><td>き</td><td>あ</td><td>お</td><td>早</td> </tr> <tr> <td>ば</td><td></td><td></td><td>ひ</td><td></td><td></td><td>こ</td><td>つ</td><td>ぼ</td><td>ん</td><td>か</td><td></td><td></td><td></td><td>豆</td><td>む</td><td>ま</td><td>も</td><td>え</td><td>び</td><td>は</td><td>て</td><td>箱</td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>七</td><td>十</td><td>七</td><td>十</td><td>五</td><td>六</td><td>五</td><td>十</td><td>十</td><td>五</td><td>十</td><td>五</td><td>十</td><td>七</td><td>十</td><td>八</td><td>十</td><td>六</td><td>十</td><td>五</td><td>十</td><td>五</td><td>八</td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td><td>ト</td> </tr> </table>		た	茶	く	か	何	う	ふ	ね	い	大	き	ぶ	に	を	小	大	せ	小	大	じ	ひ	き	あ	お	早	ば			ひ			こ	つ	ぼ	ん	か				豆	む	ま	も	え	び	は	て	箱			七	十	七	十	五	六	五	十	十	五	十	五	十	七	十	八	十	六	十	五	十	五	八			ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
た	茶	く	か	何	う	ふ	ね	い	大	き	ぶ	に	を	小	大	せ	小	大	じ	ひ	き	あ	お	早																																																																															
ば			ひ			こ	つ	ぼ	ん	か				豆	む	ま	も	え	び	は	て	箱																																																																																	
七	十	七	十	五	六	五	十	十	五	十	五	十	七	十	八	十	六	十	五	十	五	八																																																																																	
ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト																																																																															

太占祭結果



鹿ト写真

※上段の太占祭結果と下段の鹿トの骨のひび割れは関連しない。

一四・三七五 武蔵野の をぐきが雉 **立ち別れ** 去にし夕より 背ろに逢はなふよ

「武蔵野のをぐきが雉」が「立ち別れ」を導く序で、男が女のもとから立ち去った状況が、雉が飛び立つように慌ただしかったことを示す。「をぐき」は深い山間で、「去にし」の主語は「背ろ」である。「ろ」は親愛の接尾辞で、男は何かの職務のために旅立ったのであろう。「夕」は男女の逢会の時間であり、実際は夜を共に過ごしたのかもしれないがヨヒの語によってその時間が十分ではなかったことが示され、二・三句と響き合う。男の出立から隔てられた日々の長さを振り返るように、逢えないつらさが「逢はなふよ」に表出する。「なふ」は東国方言、打消の助動詞の終止形で、「よ」は詠嘆の意を表す。

一四・三七六 恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の うけらが花の **色に出**なゆめ

袖振りには、招魂・求愛を示す。恋の思いがあふれ苦しくてならない時に袖を振るのは心を確かめ合った恋人同士の間で取り交わされる愛情表現である。「武蔵野のうけらが花の」が「色に出づ」の序になっている。うけらの花が目立たない花であることから、そのようにという趣で、第五句にかかるとする説『注釋』¹⁹に従う。或本歌は男性の歌で、激しい恋をしていればその思いが外に出るのは当然であり、どのような恋をしたならその思いをうけらの花のように外に出さずにするのかと訴える。内藤茂氏はうけらの「目立たない花だが、忍ぶ恋をこの花に託した万葉人の自然を見る目の鋭さに驚く。」²⁰と述べる。忍ぶ恋を強いられた男は、どのような恋であったなら武蔵野のうけらの花のように恋心を表に出さずにするのかと、激しい恋心を内に秘める困難さを詠う。両歌は、いずれも切ない恋の局面を詠う。

一四・三七七 武蔵野の 草はもろ向き **かもかくも** 君がまにまに 我は寄りにしを

「もろ向き」は、一斉に向くという説とあちらこちらに向くという説〔草葉諸向なり、此方へも、彼方へも、依向ふを云り〕『古義』・『全集』・『注釋』²¹がある。前者は『萬葉集私注 七』に、「は」を助詞として、「モロはモロトモニで、モロテ、モロハの類の語も、兩方一緒に、兩方皆共にの意である。……このモロムキも諸共に一方に向く意で、ヨリニシヲにかかると見るべきである」とし、『古典文学大系』²⁵、『萬葉集全歌講義 第七卷』²⁶、『岩波古語辞典』²⁷もこの立場をとる。後者は『萬葉代匠記』初稿本が「もろむきはこなたへもかなたへも風にまかせてむかふをいへり」と指摘した説である。上二句が序で、「かもかくも」はもろ向きの状態を受ける。「を」は逆説的表現で、武蔵野の草が風になびいて一斉に向くとすれば、男の強い気持ちに押されてすっかり靡き寄ってしまったものを、と草の様子と男の行動、女の心情は一致する。武蔵野の草が風のまにまにあちらこちらに向くとすれば、草の様に喩えた男の心を信じた女は男に翻弄されたことになる。前者の意で取れば女の強く寄せる男への思いが表れ、後者の意で取れば男の心に左右される女の心情が表れる。

一四・三七八 入間道の 大屋が原の いはるつら **引かばぬるぬる** 我にな絶えそね

「大屋が原」は倭名抄に「武蔵國入間郡大屋_{於保}」とある。「いはるつら」は蔓性植物らしいが未詳、スベリヒユ説、ジュンサイ説がある。上三句が「引かばぬるぬる」を導く序である。ヌルはほどける意で、水島義治氏の『萬葉集全注 卷第十四』は「ぬるぬる」の語感からすれば沼や池などに生える植物がふさわしいのではないか。²⁹とする。「引く」は男が女

を誘う意、「ぬるぬる」は「何の抵抗もなく滑らかなさま。物にも心にもいう。「寝る」の意を懸ける」(『古典集成』)³⁰。「我にな絶えそね」は私との仲を絶やさないでおくれの意で、「な……そ」は禁止、「ね」は相手に対してその行為の実現を逃え望む意の終助詞である。東歌には「寝を先立たね」(三三五三)、「紐結ばさね」(三四二二八)その他全部で八例みえる。「そね」の形もこの例のほかに「言な絶えそね」(三三八〇・三三九八)、「雷な鳴りそね」(三四二二)など、八例が東歌にみえる。上代だけに見られるものであり、ししないではしいの意で穏やかな禁止を表す。類歌では、

一四・三五六 上野 可保夜が沼の いはるつら 引かばぬれつつ 我をな絶えそね
(上野国)

一四・三五二 安波をろの をろ田に生はる たはみづら 引かばぬるぬる 我を言
な絶え (未勘国)

のように地名や植物が変わり、語句の小異があるが、発想は類似している。

一四・三七九 我が背子を あどかも言はむ 武蔵野の うけらが花の 時なきものを

「あどかも言はむ」は、「あど」は「など」の訛りで疑問の副詞、この私の思いを何と言い表したらよいのだろうか。「武蔵野のうけらが花の」の三・四句は「時なき」を起こす。うけらは花が開いても蕾のままの形であると受け止められていたようで、『和歌童蒙抄』には次のように記される。

うけらとは香薬也。とこなつに花あり。つばみたるやうにて咲也。集注爾雅曰、尤は花ありといへど、ひらけざるごとしと云へり。されば時なきものとよめり。

花が咲いても開かないのと同じ状態なので「時なきものを」と解釈している。³¹水島義治氏は、「うけらの花は花期が長く、夏からずっと秋の間、長期間咲いていることから「時無き」にかかるものと思われる」と指摘する。³²「時」だけにかかるとみる説(『略解』³³・『古義』³⁴・『新考』³⁵・『全釋』³⁶・『注釋』³⁷など)もある。「時なき」はいつも時を定めず常にの意で、わが夫を恋しく思う気持の絶え間ないことをいう。類歌には、

一四・三四三 伊香保風 吹く日吹かぬ日 ありといへど 我が恋のみし 時なかりけり
二〇・四三〇 印南野の 赤ら柏は 時はあれど 君を我が思ふ 時はさねなし

の二首があり、いずれも恋や敬慕の思いが絶え間ないことを歌う。

一四・三六〇 埼玉の 津に居る舟の 風を疾み 綱は絶ゆとも 言な絶えそね

「埼玉の津」は行田市あたりの利根川の旧水路にあった船着き場、渡し場である。風が烈しいので、船を繋ぎとめている舳い綱が切れることがあっても、二人の仲を絶やさずに続けてほしい、という愛情関係が絶えないことを願う。類歌は、

一四・三六八 人皆の 言は絶ゆとも 埴科の 石井の手児が 言な絶えそね (信濃国)

と、言が絶えないことを希求する。

一四・三六一 夏麻引く 宇奈比をさして 飛ぶ鳥の 至らむとそよ 我が下延へし

「夏麻引く」は、夏、麻の皮をこいで績む意、夏麻を引く敵の意で、「宇名比」や「海上」の枕詞になる。「宇奈比」は地名とされるが不明である。

『萬葉集私注 七』の「東京都内の宇奈根が、その遺名であらうといふ説もあるが確かではない。」³⁸という記述をうけて『萬葉集注釋卷第十四』に多摩川北岸の世田谷区宇奈根と、川を挟んで南の川崎市高津区宇奈根の地名があり、「ウナネはウナヒの轉じたものでないか」³⁹と指摘する。そうであれば、三三七三の多摩川に晒す麻布の歌と関係性をもつ。現在地は未詳であるが、「葦屋の菟名日」(9・一八〇一)のように海辺の地であったともいわれる。宇奈比をさして飛ぶ鳥のように、と上三句を序にして、思う相手のいる宇奈比に至らむと、心の中でずっと思っていたのだ、と密かな思いを抱いていたことを詠む。『増訂萬葉集全註釋十』には、「ウナヒがわが思う人の住處で、作者はそこから離れて旅に出ているのであろう」と述べる。⁴⁰「夏麻引く」は夏期、麻を根引きする意で、労働の苛酷さから転じて、相手を一途に思う心を飛ぶ鳥に喩えることで清々しいイメージが伝わる。三三七四～三三七七番は武蔵野の占術、うけらの花や草に寄せて切ない恋の様々な局面を見事に歌い上げる。武蔵国東歌は序詞の割合が非常に大きい。遠藤宏氏は武蔵国東歌の序詞について次のように述べる。「多摩川にさらす手作り　さらさらに」(三三七三)では「序詞部分の「さらす(曝)」と心情表出の部分の「さらさらに」とは同音の関係にある。(中略)この同音関係にある語を繋ぎとして結合され一首をなしている(後略)」。『武蔵野の　をぐきが雉　立ち別れ』(三三七五)は「序詞部が「立ち別れ」という一語に譬喩的關係といってよい関係で統」いている。「武蔵野のうけらが花の」(三三七六・三三七九)は一首の途中に序詞が置かれる。「武蔵野の　草はもろ向き　かもかくも」(三三七七)は、「上二句は(中略)「かもかくも」ということばを起こすのではなく、草の諸向きの状態が「かもかくも」という内面を喚起している」。「入間道の　大屋が原の　いはるつ

ら」(三三七八)も「序詞部全体と心情表出部全体が結ばれており、景から心情への転換が行われている」⁴¹。遠藤氏の指摘のように序詞部は当事者の置かれた状況や強い心情の表出と関わっている。序詞「埼玉の　津に居る舟の　風を疾み」(三三八〇)は「綱は絶ゆとも」の状態を引き出し、逆説的に願望を述べる。九首中八首にみられるこれらの序詞は地名から始まっており、その土地の風物や情景と歌の発想が強い結びつきをもっていることを示す。

武蔵歌の九首は相模国と上総国の間に入れられ、武蔵国が東海道に属するものとする配列で、宝龜二年(七七二)以降の觀念が表れている。屋名池誠氏は、「東歌に反映した一部の東国方言では／・子音終わり語幹(四段活用)の動詞・動詞型接尾辞・助動詞の已然形／・母音終わり語幹(二段活用)の動詞・動詞型接尾辞の語幹末／で、それぞれエ列乙類が甲類に変わるといふ形態変化が進行中であつた」と指摘し、「東歌に反映した音韻状況は、防人歌に反映した音韻状況に先立つもの」とする。また、「東歌は(少なくともその一部は)現地方言の話者によって音韻レベルで筆録され、方言色(の少なくとも一部分)は理解不能のためやむをえず残されたものにすぎない」⁴²とする。それ故に当時の東国の言語の様を彷彿とさせるものがある。三三七五番の否定辞ナフは陸奥(三四二六)・常陸(三三九四)・上野(三四一九)・下野(四三七八)・武蔵国など足柄坂以東の上代日本語の東国方言に用いられ、現代の否定辞ナイの前身とされる。屋名池氏は、音韻・文法面から東国の国別け表示は信頼できるものとし、「ナフ」は武蔵以北の地域に連続して分布していたものと考察する。小泉保氏は、「八世紀における古代日本語では、大和地方を中心とする西部古代日本語に対して、関東・東北に基盤をおく東部古代日本語の方言的差異が認めら

れているが、その代表が否定形の「ぬ」と「なふ」であり、これが現代では「ン」と「ナイ」に投影している。」と述べる。現代方言の東西の相違はすでに奈良朝には芽生えていたのである。

三 防人歌にみる武蔵

防人制度は天智紀三年（六六四）条に「是の歳に、対馬島・壹岐島・筑紫国等に、防と烽とを置く。」とそのはじめが記される。『続日本紀』天平宝字元年（七五七）閏八月条には、「壬申、勅して曰はく、「大宰府の防人に、頃年、坂東の諸国の兵士を差して発遣せり。是に由りて、路次の国皆、供給に苦みて、防人の産業も亦、弁済し難し。今より已後は、西海道の七国の兵士合せて一千人を差して、防人司に充て、式に依りて鎮戍らしむべし。（後略）」と記され、東国からの防人派遣を廃止したとある。天平十年（七三八）度の周防國正税帳には、「向京防人參般供給額稻壹仟捌伯陸拾漆束」とある。「向京防人」の集団は三般に分かれて周防國を通過する。正税帳が断簡であるため、上般の人数は記されないが、「中般防人玖伯伍拾參人」「後般防人壹伯貳拾肆人」とあり、二般併せて一〇七七人が京に向かったことがわかる。岸俊男氏は前後の関係から上般を八〇〇人と推量し、これに天平十年度の筑後國正税帳に記される備前國児島に向かった者に加え、約二二〇〇人が防人として動員される総数とみる。天平十年度の駿河國正税帳には、「舊防人伊豆國貳拾貳人 甲斐國參拾玖人、相模國貳伯參拾人 安房國參拾參人 上總國貳伯貳拾參人 下總國貳伯漆拾人 常陸國貳伯陸拾伍人 合壹仟捌拾貳人」とある。東海道に所属する国の中でも遠江・駿河は載せられておらず、東山道に属する信濃國、上野國、下野國、武蔵國は含まれていない。岸氏は「これら六國の防人があと半分の

約一〇〇〇人を占めていたと推定する」⁴⁵。仮に一國の動員割当てが同じとすれば、一國あたり一六六名となる。武蔵國から赴いた防人は約一六六名あまりとなる。防人の任期は三年、天平神護二年（七六六）四月壬辰の条では、「東人を差点して三千に填てむ。」とあり、防人の定数を三〇〇〇人とする。武蔵國の防人歌は次の十二首である。

二〇・四三 枕大刀 腰に取り佩き まかなしき 背ろがまき来む 月の知らなく

麻久良多之 己志尔等里波伎 麻可奈之伎 西呂我馬伎己無 都久乃之良奈久

二〇・四四 右の一首、上丁那珂郡の檜前舍人石前が妻の相伴部真足女大君の 命恐み 愛しけ 真子が手離り 島伝ひ行く

於保伎美乃 美己等可之古美 宇都久之氣 麻古我弓波奈利 之末豆多比由久

二〇・四五 右の一首、助丁秩父郡の相伴部小歳 白玉を 手に取り持して 見るのすも 家なる妹を また見てももや

志良多麻乎 弓尔刀里母之弓 美流乃須母 伊弊奈流伊母乎 麻多美弓毛母也

二〇・四六 右の一首、主張荏原郡の物部歳徳 草枕 旅行く背なが 丸寝せば 家なる我は 紐解かず寝む

久佐麻久良 多比由苦世奈我 麻流祢世婆 伊波奈流和礼波 比毛等加受祢牟

二〇・四七 右の一首、妻の椋椅部刀自売 赤駒を 山野にはがし 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ

阿加胡麻乎 夜麻努尔波賀志 刀里加尔弓 多麻能余許夜麻 加志由

加也良牟

右の一首、豊島郡の上丁椋椅部荒虫が妻の宇遲部黒女

二〇・四一八 我が門の 片山椿 まこと汝 我が手触れなな 地に落ちもかも

和我可度乃 可多夜麻都婆伎 麻己等奈礼 和我弓布礼奈、都知尔
於知母加毛

右の一首、荏原郡の上丁物部広足

二〇・四一九 家ろには 葦火焚けども 住み良けを 筑紫に至りて 恋しけ思はも

伊波呂尔波 安之布多氣騰母 須美与氣乎 都久之尔伊多里弓 古布
志氣毛波母

右の一首、橘樹郡の上丁物部真根

二〇・四二〇 草枕 旅の丸寝の 紐絶えば 我が手と付けろ これの針持し

久佐麻久良 多妣乃麻流祢乃 比毛多要婆 安我弓等都氣呂 許礼乃
波流母志

右の一首、妻の椋椅部弟女

二〇・四二一 我が行きの 息づくしかば 足柄の 峰這ほ雲を見とと偲はね

和我由伎乃 伊伎都久之可婆 安之我良乃 美祢波保久毛乎 美等登
志努波祢

右の一首、都筑郡の上丁服部於由

二〇・四二二 我が背なを 筑紫へ遣りて 愛しみ 帯は解かなな あやにかも寝も

和我世奈乎 都久之倍夜里弓 宇都久之美 於妣波等可奈、阿也尔
加母祢毛

右の一首、妻の服部砦女

二〇・四二三 足柄の み坂に立して 袖振らば 家なる妹は さやに見もかも

安之我良乃 美佐可尔多志弓 蘇渥布良婆 伊波奈流伊毛波 佐夜尔

美毛可毛

右の一首、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂

二〇・四二四 色深く 背なが衣は 染めましを み坂賜らば まさやかに見む

伊呂夫可久 世奈我許呂母波 曾米麻之乎 美佐可多婆良婆 麻佐夜
可尔美無

右の一首、妻の物部刀自売

二月二十九日に、武蔵国の部領防人使掾正六位上安曇宿禰三國が進

る歌の数二十首。ただし、拙劣の歌は取り載せず。

四四二四番の左注によれば残されているのは、天平勝寶七歳（七五五）

二月の交替の東国防人の歌である。三月一日を交替の日とし、難波に集結した東国十カ国の防人たちの歌八十四首のうち、武蔵国は十二首を載せるがそのうち六首が妻の歌であるのが特徴である。

妻が歌ったうち四首が夫の歌と並べて載せられる。語句の響き合いがうかがわれるのは四四一五と四四一六番、四四二二と四四二四番であるが、相手の句をとり入れて詠む都人の唱和のあり方とは異なる。

すでに岸俊男氏が指摘しているが、防人歌の配列順序が一定の基準に基づいているものとみて、武蔵では上丁（妻）(1)―助丁(1)―主帳(1)―上丁(5)の歌が残されているが、各国の防人集団には国造丁（国造）―助丁―主帳丁（帳丁・主帳）―（火長）―上丁（防人）の關係が成立していたと推察する。丁は軍防令に兵士は「同戸之内每三丁取二丁」⁴⁶（兵士簡点条）にある丁に通じるとみる。東国の防人集団は最も多くて三〇〇人以下、少ない場合は二〇―三〇人のこともあり、国造丁は一名、助丁・主帳もそれぞれ一名もしくは二名ずつ、人数の少ない場合にはその中のあるものを欠く

こともあったと思われる。彼らの下に一般の防人兵士(上丁)があり、その十人ごと一組の長として火長が任ぜられていたらしい。武蔵国では、国造丁にあたる者の歌は載せられず、助丁(秩父) 大伴部小歳―主帳丁(荏原) 物部歳徳―火長(歌が載せられていない)―上丁(那珂) 檜前舍人石前・(豊島) 椋椅部荒虫・(荏原) 物部広足・(橋樹) 物部真根・(都筑) 服部於由・(埼玉) 藤原部等母麻呂の名がみられる。武蔵国の防人は大伴部、物部などの者が任じられている。防人歌は一字一音の万葉仮名で表記されているので、当時の東国方言の訛音を伝えている。追野虔徳氏は「武蔵国には、訛形の場合を除いて、特殊仮名遣いの関係音節は六十余例あるが、そのうち誤りと思われるものは、わずかに「都久之倍夜里言」(筑紫へ、四四二二)の一例だけである。」⁴⁷と指摘する。武蔵国では、上代特殊仮名遣が正確に書き留められている。

三〇・四三 麻久良多之 己志尔等里波伎 麻可奈之伎 西呂我馬伎己無 都久乃之良奈久

「枕大刀」「まかなしき」「背ろがまき来む」のようにマ音が重ねられ、引き離されるように旅立った夫が再び戻ってくる日がわからないと歌う妻の哀切さが漂う。「枕大刀」のタシはタチの訛り、寝るときに枕元に置くことからこのように称したかといわれる。カナンは愛憐の意で三三五一番にも用いられる。背ろの「ろ」は親愛の接尾辞、東国方言で三三七五番にもみえる。「まき来む」は原文「馬伎己無」。マキは難解で、メキと訓む説(『古典文学大系』⁴⁸・『注釋』⁴⁹・『新古典文学大系』⁵⁰等)もある。諸説があり、『萬葉代匠記』初稿本は「めきこんは、まきこんなり。まきは罷の字にて、まかり歸こんの心なり」とする。『萬葉集全歌講義 第十卷』にあるように

「マカリコム(罷り来む)」の意⁵²、とみられる。「ツク」は「ツキ」の訛り、「知らなく」は、「知らず」のク語法である。檜前舍人は檜前舍人部の略で、檜前廬入宮を宮とした宣化天皇の名代部とみられる。大伴部真足女はその妻であるが、武蔵国は妻の歌六首を採録し、他の国に比して異例である。夫の歌は載せられない。四四二四番の左注に記されるように、拙劣歌ゆえに除かれたか、と考えられる。出立の場で夫婦が詠み交わした歌であろうか。

三〇・四四 於保伎美乃 美己等可之古美 宇都久之氣 麻古我豆波奈利 之末豆多比由久

この歌には、海路の不安を詠む。作者が大伴部であることに関わるのか、防人の中に「大君の命恐み」と詠めるほどの思想的統制がとれる階層が存在したことが知られる。多田一臣氏はこのことばに「王権の權威を奉ずることの自負とその絶対性に対するあきらめにも似た服従の気持ち」の二重性をみる。⁵³「真子」は愛すべき若い娘の意で、異郷を旅行く不安を和らげてくれるのが、家に居て案じてくれる愛する妻との紐帯であった。「真子」には「古ゆ 語り継ぎつる うぐひすの 現し真子かも」(19・四一六六)のようにほととぎすがうぐいすの愛を受けて育った子という例がある。「はなり」は「はなれ」の訛りである。四三三八番の場合と同じく、助丁の階級でありながら、一般兵士上丁よりも後に置かれている。

三〇・四五 志良多麻乎 弓尔刀里母之弓 美流乃須母 伊弊奈流伊母乎 麻多美弓毛母也

「白玉を手に取り持して」の「持して」は「持ちて」の訛り、中央方言の

「^な如す」に相当する「^なノス」が出てくる。夫は「イへなる妹」と言うが、妻は「イハなる我」と返す。夫は中央語形によったと思われる。実際は手に入れることは出来ない「白玉」を手に取り持って愛おしむように、家に再び戻って来て妻を見たいという心情が歌われている。「また見てももや」のテモはテムの訛り、モヤは詠嘆の終助詞であろうが、類例がない。

二〇・四六 久佐麻久良 多比由苦世奈我 麻流祢世婆 伊波奈流和礼波 比毛等

加受祢牟

旅中の夫の旅の丸寝に対して、「紐解かず寝む」と、夫の苦労を偲びつつ、変わらぬ愛情を誓う。旅行く君が丸寝をするならば、家にいる私は紐を解かずに寝よう、と労苦を分かち合い、少しでも夫の苦しい旅に近づこうとしている心情がうかがわれる。四一―三番でも「丸寝」が詠まれる。

二〇・四七 阿加胡麻乎 夜麻努尔波賀志 刀里加尔豆 多麻能余許夜麻 加志由

加也良牟

「赤駒」(栗毛の馬)が詠まれる。それを山野に放し捕まえることが出来ず、夫を徒歩で旅立たせる辛さを詠う。軍防令には「凡そ防人防に向はむ、若し家人、奴婢及び牛馬、将て行かむと欲ふこと有らば、聴せ。」とある。「山野にはがし」のハガシはハガチの訛り。ハガツはハナツと同義とされている。厩牧令には「皆十一月上旬より起りて乾たるを飼へ。四月上旬よりは青きを給へ。」とある。この歌が詠まれた正月下旬か二月初めは放牧期ではない。『萬葉集全注 卷第二十』は「夫を徒歩で旅立たせる辛さの余りに、殊更に季節を無視して詠んだとも考えられ、又馬など飼っていないかったかも知れ⁵⁴」ない」と指摘する。捕りにてのカニテはカネテの訛りで、

逃げた馬は捕らえにくくなす術がない。「多摩の横山」について『全釋』は、「それは今の八王子市の西南に接し、多摩御陵に近い地点にある横山のことであらう。併しこれらの武藏國の防人等が、當時の國府即ち今の府中に集合して、相模路を取って東海道を進むとすると(中略、直ちに多摩川を渡つて南進する筈で(中略)横山も多摩川の南岸の丘陵でなければならぬ⁵⁵」とする。『萬葉集全注 卷第二十』は「東京都府中市の南、南多摩郡多摩町の丘陵地帯」で、「この地は、作者らの住む豊島郡から二〇キロメートルばかり西南に当たるとする。徒歩のカシはカチの訛りで、ユは手段・方法を表す。カ：ムは詠嘆的疑問を示し、「からまる君をはかれか行かむ」(20・四三五一 上総國、「弓のみたさ寝か渡らむ」(20・四三九四 下総國)の例がある。

二〇・四八 和我可度乃 可多夜麻都婆伎 麻己等奈礼 和我豆布礼奈、都知尔

於知母加毛

わが門の「片山椿」は、家に残していく妻、相手の女性を喩える。「我が手触れなな」のナナはくしないでの意の東国語法である。上のナは打消しを表すが、下のナは語義未詳とされる。「なな」は、打消の助動詞「なに願望の助詞「な」が接したものの『古典集成』⁵⁷とする説、「ナナ」は「ナニ」の訛り。「な」は打消。「に」は接続助詞で、…しないのに、…しないで、の意」(『萬葉集全注 7』⁵⁸)かともされる。「新田山嶺には付かなな」(14・三四〇八 上野國、「うらがれせなな常葉にもがも」(14・三四三六 上野國)、「かくすすそ寝なななりにし」(14・三四八七)、「忘れはせなないや思ひ増すに」(14・三五五七)、「帯は解かなあやにかも寝も」(20・四四二二 武藏國)、「結(叡比)は解かなあやにかも寝む」(20・四四二八)な

どの例がある。「ナナ」は防人歌で武蔵に二例現れている。解釈不定の三四〇八「ネニハツカカナ」もこの例だとすると、「ナナ」の分布は「ナフ」の分布域に含まれる。「ナフ」「ナナ」ともに動詞の否定を表しているものと考えられるが、用例があまりに僅少であり、これらの語形変化のあり方はわからない。特に「ナナ」の後ろ側のナの意味・機能やその文法的性格は不明である。「地に落ちもかも」の落チモは落チムの訛り。地に落つは空しくなる意を含む。モ(ム)カモは、未来を詠嘆的に推量する語法で、自分の留守中に女が他の男のものになるのではないかと不安を表している。片山が山の傾斜地をさすのならば、そこに生える椿は女の置かれた危うげな状況を示唆していよう。椿が地に落ちるといふ形容は椿の花が花の形を留めたまま地面に落ちる風情を捉えており、男の危惧がよく表れている。

二〇・四二五 伊波呂尔波 安之布多氣騰母 須美与氣乎 都久之尔伊多里言 古布

志気毛波母

イハはイへの訛り、アシフはアシヒの訛りである。武蔵の沼沢付近では、屋内で干した葦を焚きとても住みよいとは言えない状況であっても、たとえ煤けてはいても、この男には我家は住みよいのである。良ケは良キの訛り、筑紫に着いてから恋しく思うだろうな、と思ひめぐらしている。「恋しけ思はも」コフシケモハモは、「恋しく思はむ」コヒシクモハムの東国形か(『古典集成』⁵⁹)、とされる。家では葦火を焚いてはいるが住みよいものを、筑紫に着いてから恋しく思うだろうなあ、と誰もが思う普遍的な感情を表出している。

二〇・四二六 久佐麻久良 多妣乃麻流祢乃 比毛多要婆 安我弓等都氣呂 許礼乃

波流母志

旅の丸寝の紐を縫い付けた糸が切れたら、「我が手と付ける」は我が手と思って、「これの針持し」これの針をもって付けなさい、と妻は針に思いを託す。ハルモシはハリモチの訛りである。夫婦は別れに際して、互いに相手の紐を結び、それぞれの魂を結び込め無事を願った。旅先で糸が切れても、自分が縫い付けてやることは出来ない。せめてもの思いで、夫に貴重な針を手渡したのであろう。

二〇・四二七 和我由伎乃 伊伎都久之可婆 安之我良乃 美祢波保久毛乎 美等登

志努波祢

「我が行き」は私の筑紫への旅、イキツクシカバはイキツカシカバの訛りで、「息づかし」は溜息をつくほど苦しい意の形容詞である。ハホはハフの訛りで、峰に這うようにかかる雲を見て遠くのものをおぼせる意である。防人たちは東海道を經由して足柄峠を越えていった。見トトは見ツツの訛り、「偲はね」は偲んでおくれ、の意で私の旅立ちで離れて逢えないことがため息が出るくらい苦しかったなら、足柄の峰にかかっている雲を見ながら私を偲んでおくれ、と妻に希求している。

二〇・四二八 和我世奈乎 都久之倍夜里言 宇都久之美 於妣波等可奈、阿也尔

加母祢毛

「背な」のナは親愛の情を示す接尾辞である。私の夫を筑紫へ「遣りて」には、防人に強制的に徴発されて、行かせたくないのに行かせる意がこもる。「愛しみ」は「愛し」のミ語法で、夫に対する妻の切ない思いが伝わる。「帯は解かなな」のナナは四四一八番でも触れたが、アヤニカモの理

屈を越えた夫への愛情と響き合い、「寝も」に続く。「寝も」は「寝む」の訛りで、家にいながら帯も解かず丸寝をする我が心の不思議さを歌う。

二〇・四三 安之我良乃 美佐可尔多志^豆 蘇渥布良婆 伊波奈流伊毛波 佐夜尔
美毛可母

二〇・四四 伊呂夫可久 世奈我許呂母波 曾米麻之乎 美佐可多婆良婆 麻佐夜
可尔美無

四四二三番と四四二四番は、旅の途中にある夫と家なる妻の魂の通いを歌う。四四二三番では「足柄のみ坂」と東海道の難所足柄峠を越える際の「袖振り」を歌う。「立して」は「立ちて」の訛り、「袖振らば」は袖を振ったならば、の意である。「坂」はこの世と他界との境界であり、神霊が支配する危険な場所とされ、旅人は生命を奪われる恐れがあった。そこで「袖振り」をして、妻の魂との交流をはかり、その加護を祈る。上野国の歌「日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ」(14・三四〇二)にも袖振りによる夫と妻の魂の交流が詠まれる。イハはイへの訛り、サヤは視覚にはっきりと意識されること、「見もかも」は「見むかも」の訛りで、カモは詠嘆的疑問を表す。埼玉郡から足柄峠までは実際には見えないが、「み坂」での袖振りは旅に出た夫と、家にある妻の魂の連帯を図ることができる信じられていたのだろう。「家にいる妻ははっきりと見ることだろうか」という夫の心を汲み取ったように、妻は四四二四番で、色濃く夫の衣は染めればよかったものを、「まし」は反実仮想なので実際には染めなかったのである。中西進氏は「紅の濃染」なる語あり。その種の濃い色をいうか(『万葉集全訳注原文付』⁶⁰)と述べる。また、木下正俊氏は、「無位の防人たちは、皂染即ち櫟くりぞめのくぬぎ実で染め鉄媒染で黒く

発色させた、いわゆるくろまみ椽染めを着ていたのであろう。ここは鉄分が不足して色が淡かったのだから」と記す。「深き染め」ならば、木下氏の見解になろう。「み坂賜らば」のタバルはタマハルの約で、通行を足柄峠の神に許されたならば、「さやかに」はっきりと見えるでしょうに、と歌っている。あなたが袖を振ると知っておりましたら、濃き色に染めましたものをと、馴染んだ夫婦の情の通いがうかがわれる。

武蔵国の防人歌には傍点を施したように、本来「知」類の仮名で書かれるべきところを「斯」類の仮名で写した例がみられる。「麻久良多之」(枕刀 四四一三三)、「刀里母之^豆」(取り持ちて 四四一五五)、「波賀志」(放ち 四四一七)、「加志」(徒歩 四四一七)、「母志」(持ち 四四二〇〇)、「多志^豆」(立ちて 四四二二三)である。有坂秀世氏はこの現象について「ち」(ㄷ)の破裂音が東国ではやく破擦音化して、斯類の仮名で写された右の方言が、⁶²の⁶¹のような音になっていた可能性を指摘する。また、迫野虔徳氏は、防人歌には「月」を「ツク」(都久 四四一三三)、「葦火」を「アシフ」(安之布 四四一九)、「針」を「ハル」(波流 四四二〇〇)のようにイ段音をウ段音にした表記例が常陸・下野・下総・武蔵にみられ、この例は「チ」を「シ」にする表記例を持つ国に限られており、中央出身の筆録者によって記録されたものと結論付ける。⁶³ 訛音を正確に書き留めようとする意識がうかがえる。

屋名池誠氏は「防人歌は中央方言の耳をもった話者が音声レベルで筆録したもの」であり、「東国方言は、イ列・エ列の甲類・乙類が中央方言に先立って合流しつつあった可能性が高かったことをのぞけば、音韻レベルでは中央方言とさほど異なるところがなかった」が、「武蔵方言・下野方言ではイ列はやや中舌的な音色を有し、子音の口蓋化がないと、ウ列にか

なり近く聞こえたものであろう。」と指摘する。さらに、「防人歌の上進された国を、東山道の信濃から隣接する東海道の遠江へ、さらに東海道諸国を東へと並べ、もとは東山道所属で宝龜二(七七二)年(防人歌採録の天平勝宝七(七五五)年の一六年後)東海道に編入された武蔵を介して、その後ろにのこりの東山道諸国を東から西へと並べてみると、隣接する国どうしで同じ方言的特徴がきれいに連続してゆき、一定の広がりを見せていることが見て取れ」、「古来の人的交流のありかたを反映している」という。武蔵国荏原郡において夫の歌はイへ、妻の歌はイハである。夫婦の間に相違を見せる「家」について、「《家》にあたる語がイへであるか、イハであるかの境界は武蔵国の中を走っているらしい。現在の二十三区西南部にあたる荏原郡のような武蔵東部は、下総国と連なるイへの使用域であり、埼玉郡や現在の川崎周辺にあたる橋樹郡のような武蔵北部・西部は上野・下野両国に連なるイハの使用域であったようだ。」と武蔵国の音声の特徴を記す。また筆録に際して「事前に「聞いた通りに記せ」という明示的な指示が統一的に与えられていた」とみる。⁶⁴「ナフ」と語源的なつながりがあると考えられる「ナナ」、「チ」を「シ」にする表記例やイ段音をウ段音にする表記例、四四一五番の「ノス」、四四一五番にみられるイへと四四一六番にみられるイハは、微細な例であるが、武蔵国の防人の音声を今に伝えている。

おわりに

武蔵国の東歌と防人歌から奈良時代の人々の生活や心情表現をみてきた。世田谷が関わるのは、ほんのわずかである。けれどもこれら二十一首から古代の世田谷の暮らしを想像することは出来るだろう。多摩丘陵や多摩川

を生活の拠り所とし、遠くに富士の嶺を仰ぎながら、彼方に寺院の塔を望む。山野を切り開き、田畑を耕しながら平凡な恋をし、草木や花に心を寄せて人間の営為として心情を表出する。五音・七音を指を折って数えながら見よう見まねで綴ったのであろうか。税を取り立てられる貧しい生活、夫を防人にとられて涙し、ひたすら祈りを捧げながらも生活にささやかな喜びを見出して生きていく人間の本質的な姿は、現代人と変わるところがない。武蔵国の歌には人間の哀切さがにじみ出ている。ことばの異域性や地名は奈良時代から現代まで連続と受け継がれているのである。

注

- 1 『新修世田谷区史 上巻』一九六二年十月 世田谷区発行
- 2 桜井満『万葉の歌—人と風土—』13 関東南部』中西進企画 一九八六年一月 保育社
- 3 河村秀根・益根編『書紀集解』三 小島憲之本文補注 一九六九年九月 臨川書店
- 4 谷川十清『日本書紀通證』三 小島憲之解題 一九七八年一月 臨川書店
- 5 武蔵国の項 江口桂執筆『日本古代道路事典』古代交通研究会編 二〇一三年 二月 八木書店
- 6 『武蔵国』『日本歴史地名大系第十三巻 東京都の地名』二〇〇二年七月 平凡社
- 7 大場磐雄「多摩古代文化と歸化人」『西郊文化』第六輯 一九五三年一月、『狛江市史』第二編 原始・古代 第五章 亀塚古墳 小出義治執筆 一九八五年三月 狛江市発行 亀塚古墳出土金銅製毛彫飾金具は東京国立博物館に所蔵されている。
- 8 桜井清彦・菊池徹夫「古代のむさし」『せたがやの歴史』一九七六年九月 東京都世田谷区発行
- 9 前掲書7 『狛江市史』第二編 第七章 律令時代 十菱駿武執筆

- 10 前掲書 6
- 11 坂本太郎「乗瀨駅の所在について」『古代の駅と道』坂本太郎著作集八巻 一九八九年五月 吉川弘文館
- 12 『日本文学地名大辞典—詩歌篇(下巻)』大岡信監修 一九九九年八月 遊子館
- 13 武田祐吉『増訂萬葉集全註釋十』一九五七年三月 角川書店
- 14 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 第七卷』二〇一一年八月 笠間書院
- 15 柴生田稔「東歌及防人の歌」『萬葉集大成10作家研究篇下』一九五四年五月 平凡社
- 16 西郷信綱「萬葉の相聞」『萬葉集大成5歴史社會篇』一九八六年六月 平凡社
- 17 『萬葉集三』(日本古典文学全集4) 小島憲之 木下正俊 佐竹昭広校注・訳 一九七三年一二月 小学館
- 18 『萬葉集四』(新潮日本古典集成) 青木生子 井出至 伊藤博 清水克彦 橋本四郎校注 一九八二年一月 新潮社
- 19 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十四』一九六五年三月 中央公論社
- 20 内藤茂『植物で見る「万葉の世界」』二〇〇四年九月 國學院大學「萬葉の花の会」
- 21 鹿持雅澄『萬葉集古義 第六』一九八八年七月 國書刊行會
- 22 前掲書 17
- 23 前掲書 19
- 24 土屋文明『萬葉集私注 七』一九八二年一月 筑摩書房
- 25 『萬葉集三』(日本古典文学大系6) 高木市之助 五味智英 大野晋校注 一九六〇年十月 岩波書店
- 26 前掲書 14
- 27 『石波古語辞典補訂版』大野晋 佐竹昭広 前田金五郎 一九九〇年二月 岩波書店
- 28 『萬葉代匠記 六』(契沖全集 第六卷) 一九七五年四月 岩波書店
- 29 水島義治『萬葉集全注 卷第十四』一九八六年九月 有斐閣
- 30 前掲書 18
- 31 藤原範兼『和歌童蒙抄』『日本歌学大系 別卷一』一九五九年六月 風間書房
- 32 前掲書 29
- 33 橋千蔭『萬葉集略解 第四輯』一九九九年九月 東京修學堂
- 34 前掲書 21
- 35 井上通泰『萬葉集新考 第五』一九二八年八月 國民圖書
- 36 鴻巣盛廣『萬葉集全釋 第四冊』一九三三年十月 廣文堂書店
- 37 前掲書 19
- 38 前掲書 24
- 39 前掲書 19
- 40 前掲書 13
- 41 遠藤宏「万葉集東歌における序詞の様相(下)」『論集上代文学 第十九冊』一九九一年一二月 笠間書院
- 42 屋名池誠「上代東国方言の形態変化と東歌の筆録者」『藝文研究』第一〇〇号 二〇一一年六月
- 43 前掲書 42
- 44 小泉保「上代日本語の東と西—上古における否定辞ヌとナフの分布」『万葉古代学—万葉びとは何を思い、どう生きたか』中西進他著 二〇〇三年五月 大和書房
- 45 岸俊男「防人考—東国と西国—」『日本古代政治史研究』一九六六年五月 塙書房
- 46 前掲書 45
- 47 迫野虔徳「防人歌と上代特殊仮名遣い」『文献方言史研究』一九九八年二月 清文堂出版
- 48 『萬葉集四』(日本古典文学大系7) 高木市之助 五味智英 大野晋校注 一九六二年五月 岩波書店
- 49 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第廿』一九六八年十月 中央公論社
- 50 『萬葉集四』(新日本古典文学大系4) 佐竹昭広 山田英雄 工藤力男 大谷雅夫 山崎福之校注 二〇〇三年十月 岩波書店
- 51 『萬葉代匠記 七』(契沖全集 第七卷) 一九七四年八月 岩波書店

- 52 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 第十卷』二〇一五年五月 笠間書院
- 53 多田一臣「大君の命かしこみ」について『古代文学表現史論』一九九八年一月 東京大学出版会
- 54 木下正俊『萬葉集全注 卷第二十』一九八八年一月 有斐閣
- 55 鴻巣盛廣『萬葉集全釋 第六冊』一九三五年二月 廣文堂書店
- 56 前掲書 54
- 57『萬葉集五』（新潮日本古典集成）青木生子 井出至 伊藤博 清水克彦 橋本四郎校注 一九八四年九月 新潮社
- 58 多田一臣『萬葉集全解 7』二〇一〇年三月 筑摩書房
- 59 前掲書 57
- 60 中西進『万葉集全訳注原文付（四）』一九八三年十月 講談社
- 61 前掲書 54
- 62 有坂秀世「奈良時代東國方言のチ・ツについて」『國語音韻史の研究増補新版』一九五七年十月 三省堂
- 63 前掲書 47
- 64 屋名池誠「奈良時代東國方言の音韻体系と防人歌の筆録者」『古典語研究の焦点』二〇一〇年一月 武蔵野書院
- 本文の引用は以下による。なお、引用中のルビはバラルビとした。
- a 『日本書紀②』（新編日本古典文学全集3）小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵
中進 毛利正守校注・訳 一九九六年十月 小学館
- b 『諸本集成 倭名類聚抄「本文篇」』一九六八年七月 臨川書店
- c 『日本靈異記』（新編日本古典文学全集10）中田祝夫校注・訳 一九九五年九月 小学館
- d 『先代舊事本紀』鎌田純一著 一九六〇年三月 吉川弘文館
- e 『日本書紀③』（新編日本古典文学全集4）小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵
中進 毛利正守校注・訳 一九九八年六月 小学館
- f 『続日本紀 二』（新日本古典文学大系13）青木和夫 稲岡耕二 笹山晴生 白藤

- 禮幸校注 一九九〇年九月 岩波書店
- g 『続日本紀 三』（新日本古典文学大系14）青木和夫 稲岡耕二 笹山晴生 白藤
禮幸校注 一九九二年一月 岩波書店
- h 『続日本紀 五』（新日本古典文学大系16）青木和夫 稲岡耕二 笹山晴生 白藤
禮幸校注 一九九八年二月 岩波書店
- i 『法隆寺献物帳』『寧樂遺文 中巻』竹内理三編 一九六二年十月 東京堂出版
- j 『続日本紀 四』（新日本古典文学大系15）青木和夫 稲岡耕二 笹山晴生 白藤
禮幸校注 一九九五年六月 岩波書店
- k 『新編武藏風土記稿』国立国会図書館デジタルコレクション
- l 『延喜式 中』虎尾俊哉編 二〇〇七年六月 集英社
- m 「新抄格勅符抄」『新訂増補國史大系 第二十七卷』黑板勝美編輯 一九三三年五月 吉川弘文館
- n 『日本後紀』（國史大系）黑板勝美編輯 一九八九年十月 吉川弘文館
- o 『本草綱目啓蒙』卷之八 山草部 草之一 国立国会図書館デジタルコレクション
- p 『和漢三才圖會』下 寺島良安編 一九七〇年三月 東京美術
- q 『医心方 卷1 A 医学概論篇』丹波康頼撰 榎佐知子著 二〇一一年一月 筑摩書房
- r 『延喜式 下』虎尾俊哉編著 二〇一七年二月 集英社
- s 天平十年「周防國正税帳」「筑後國正税帳」「駿河國正税帳」『寧樂遺文 上巻』
竹内理三編 一九六二年九月 東京堂出版
- t 『律令』（日本思想大系3）井上光貞 関晃 土田直鎮 青木和夫校注 一九七六年一月 岩波書店
- *『萬葉集②』（新編日本古典文学全集7）小島憲之 木下正俊 東野治之校注・訳
一九九五年四月 小学館
- *『萬葉集③』（新編日本古典文学全集8）小島憲之 木下正俊 東野治之校注・訳
一九九五年一月 小学館

*『萬葉集④』（新編日本古典文学全集9）小島憲之 木下正俊 東野治之校注・訳
一九九六年八月 小学館

○地図・写真について

・1頁の地図は、佐々木恵介「関東古代国郡図」（財団法人角川文化振興財団編『古代地名大辞典 索引・資料編』一九九九年、角川書店 所収）をベースにして、「武蔵国諸郡」（東京都世田谷区編『新修世田谷区史 上巻』一九六二年、世田谷区 所収）、江口桂「武蔵国」（古代交通研究会編『日本古代道路事典』二〇〇四年、八木書店 所収）などを参考に作成した。

・武蔵国略図は『國史大辭典 第13巻』一九九二年四月発行 598頁から、吉川弘文館の許諾を得て掲載した。

・鹿卜写真は武蔵御嶽神社のご提供をうけ、太占斎場（二〇一八年二月撮影）・太占祭結果は許諾を得て掲載した。

・鹿卜写真以外はすべて筆者が撮影した。

・高麗若光の墓（二〇一六年一月撮影）は聖天院の許諾を得て掲載した。

・多摩川歌碑（二〇〇三年九月撮影）・拓本（一九八四年一月）は伊豆美神社の許諾を得て掲載した。

※本稿執筆にあたり、北川和秀氏・屋名池誠氏のご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

（からすだに ともこ 日本語日本文学教授・近代文化研究所所長）

〔正 誤〕

本稿「東歌・防人歌にみる武蔵」13頁 上段 12・13行目の記載の一部に誤りがありましたので、左記のように訂正させていただきます。

12行目（誤）男鹿の左肩甲骨↓（正）雄鹿の右肩甲骨

12・13行目（誤）忌火で焼いた錐で突き通す鑽焼によるひび割れ↓（正）忌み火で妬いた時に出来るひび割れ

雄鹿の右肩甲骨を忌み火で妬いた時に出来るひび割れの如何によって、農作物の吉凶を占うことを、二〇二〇年十二月三十日に武蔵御嶽神社の天野様より御教示いただきました。